

感 覚 と 知 識

——ジョン・ロックとトーマス・シドナム——

田 村 均

1 はじめに

本論文は、ジョン・ロックの『人間知性論』と『人間知性論草稿B（以下『草稿B』）』に見いだされる感覚の単純観念 (simple ideas of sensation) についての言説を取り上げ、ロックは「感覚の単純観念」という術語を用いていったい何を言いたかったのか、ということ进行を明らかにすることを試みる。ロックが単純観念という部類に入れたのは、感覚のそれのほかに、思考体験 (thinking) や意志作用の体験 (volition) といった内省の単純観念があり、さらには、感覚と内省に共通するものとして、快と苦 (pleasure and pain)、存在 (existence)、一性 (unity) などの観念までも含まれた。本論文で目標とするのは、このように多岐にわたる単純観念の言説全体の解明ではなく、感覚の単純観念の認識論的役割のある側面を照らし出すことである。その側面とは、感覚の単純観念の断片性である。すなわち、本論文は、感覚の単純観念を、ヒトが世界認識を組み立てるための単位となるような断片的対象として解釈しようとする試みである。

感覚の単純観念とは、ロックの定義では、一様な見え姿をした感覚的所与のことである。この定義がうまく成立するかどうかは、第4節で検討することとする。今、ロックを離れて認識論一般の文脈で考えたとき、単純観念とはいったい何であると考えられるのだろうか⁽¹⁾。今かりに近世認識論の通例に従って主観—表象—客観という三項関係を借りれば、感覚の単純観念は、明らかに、このうちの表象の位置を占めると見なされよう。もちろん、それぞれの種の実体の複雑観念 (the complex ideas of particular sorts of substances) もまた表象の位置を占めるので、感覚の単純観念だけが排他的に表象であるわけではない。だが、実体の複雑観念は感覚の単純観念の複合体なのだから、結局は、感覚の単純観念こそ主観と客観の仲を取り持つ大事な媒介者と見なされることになる。こうなれば、おそらく、感覚の単純観念という表象を媒介にしてどうやって客観が知られ得るのか、という問題が問われずには済むまい。

ところが、こういう関心に沿って『人間知性論』を読んでもみると、期待は裏切られる。ロックは、この問題について、ほとんど議論らしい議論をしてはいない。有名な一次性質と二次性質の区別の議論（第2巻第8章）は、表象と客観の結びつきを前提とした上で、その結びつき

方の違いを論じているのであって、結びつくつかないかを吟味しているのではない。一次性質の単純観念は、対象そのものの正確な写しであるが、二次性質の単純観念は、対象の微粒子的内部構造の因果的帰結である、と言っているだけである。観念の実在性、十全性、真理性を論ずる第2巻第30～32章でも、単純観念の名前の指示対象を論ずる第3巻第4章でも、知識の実在性を論ずる第4巻第4章でも、つねに、写しとしてであれ因果的にであれ、感覚の単純観念が客観と結びついていることは自明の前提なのであり、論証されるべきことではない。

言い換えれば、ロックの感覚の単純観念の説は、表象主義に通常ともなう認識論的な問題を身にまもっていない。だから、感覚の単純観念を表象であると解してみても、表象と外界の関係とは別の認識論的問題を探り当てないかぎり、ロックが「感覚の単純観念」という術語で何を伝えたかったのかは不明のまま残ることになる。本論文の解釈では、ロックが直面していた認識論の問題は、表象外界関係の問題ではなく、断片的観察報告や個別の実験が、理論的・体系的説明から独立して認識的価値を持つ、ということを示すことであった。「感覚の単純観念」は、このような断片的な認識の成立を根拠づけるときにロックが用いた術語なのである。

以下では、まず2節で、『人間知性論草稿B』の一節を取り上げ、ロックの観念説がその出発点でどのような特徴を持っていたのかを見る。この2節で、感覚の単純観念が断片的対象であるというとき、何から断ち切られた一片であるのかを示す。すなわち、感覚の単純観念は、第一義的には、〈外界から断ち切られた〉という意味で断片であるのではなく、〈因果的説明の体系から断ち切られた〉という意味で断片であることを示す。続いて、3節で、ロックの医学上の師であるトーマス・シドナム(Thomas Sydenham)の医学論文数編を取り上げ、医学に関わって当時どのような方法論上の問題があったのかを見る。さらに4節で、ロックの『人間知性論』の感覚の単純観念の言説を取り上げる。感覚の単純観念は、スコラの形相理論による因果的説明や自然界の諸事物の総体としての関係性から切り離された断片的対象としてあることが意図されており、そのような断片は人間の感覚機能の洗練によって世界に新たな分節を構成していくことによって形成される、とロックが考えていた、ということを示したい。

2 〈事物の現れ〉としての感覚の単純観念

2・1 『草稿B』96節の問題

『草稿B』第96節に奇妙な一文がある。奇妙なのは、観念(ideas)の存在の仕方が常識外れだからである。常識的な理解によれば、観念とは〈心の中にある〉対象である。ロック自身『草稿B』においてももちろんこの用法を踏襲している。まず、総括的に、「観念という言葉は人間が思考するとき知性の対象(the object of the understanding)となるもののすべてを表し、……思念(Notion)、想念(phantosme)、形像(species)その他(B§3, p.103)」⁽²⁾を意味する、と定義する。そして、感覚の単純観念については、「われわれの感覚は個々の感覚的な

対象に関わって心の中に事物の観念ないし像を運び込む (convey into the minde severall distinct Ideas or Images of things) (B§ 18, p.128)」と描写する。観念は、〈心の中に〉あると考えてよいのは明らかである。ちなみに、これらの言葉は、刊行された『人間知性論』にほとんどそのまま現れる (1-1-8, 2-1-3 を見よ)⁽³⁾。ロックは、観念についての基本的な考え方を、『人間知性論』と『草稿B』との間で大きく変えてはいない⁽⁴⁾。

さて、問題の一節は以下である。原文を添えて引用する。

引用 1 「そして、観念を産出した原因の方はなにか関係的なものを持つかもしれないが、観念それ自体は、知性の中にあるものとして考えられようと、われわれの外なる事物の現れと考えられようと、実定的であると見られるべきなのである (B§ 96, p.216)」

And soe though the causes that produces them may have some thing relative, yet the Ideas them selves considered *either as in the understanding, or as the appearances of things without us* are to be accounted positive. (ital. add.)

この一節がわれわれを戸惑わせるのは、観念が、知性の中にある (in the understanding) 場合と、外なる事物の現れである (the appearances of things without us) 場合とが、二者択一のかたち (either … or …) で対比されている点である。対比される項の後者の方を〈外なる事物の《心の中における》現れ〉と読むことができるのならば、何の問題も生じない。一般に知覚表象とはそういうものだからである。しかし、この一節では、〈外なる事物の現れ〉は、〈知性の中にある〉ことと二者択一的に対比されているのだから、奇妙なことになる。この一節における〈現れ〉は、心の中にあるとは言いきれない。つまり、対比が意味をなすように読もうとすれば、あえて〈外なる事物の《心の外における》現れ〉と読むしかない。観念が心の外にあるものとして理解されることになるのである。

この一節の眼目は、もとより、観念が心の外にあるという、ロックの用語法からいっても異例な主張を立てようということではない⁽⁵⁾。そうではなくて、眼目は、観念は関係的 relative なものでなく実定的 positive な対象だ、という主張である。実定的 positive な対象として扱いさえすれば、観念を、心の中の何かと考えようと、外なる事物の (心の外にある) 現れと考えようと、どちらでもよい。換言すれば、観念が内在的对象であるかどうかということよりも、関係的 relative か実定的 positive かという対比の方が重視されているのである。だが、この対比は、見慣れた認識論的対比ではない。ロックはいったい何を言いたいのか。

『草稿B』96節の冒頭で、ロックは、白いとか甘いといった観念を取り上げて、こういう感覚が引き起こされるのは「ある形をした微粒子によって (by particles of certain figures)」であろうと述べる。そして、ロックは言う。

引用2 「形とは、それ自身においては、いくつかの延長を一緒にして比較した関係的な考察 (relative consideration) であるが、……白いとか甘いという観念は、一個の単純で実定的な観念 (one simple positive Idea) として、なんらの関係的な考察 (relative consideration) なしにわれわれの中に産み出され、保持される (B§ 96, p.215)」

この文脈においては、実定的 positive であるとは、他と切り離してそれだけ取り出せるということである⁽⁶⁾。たとえば、三角形という形は、他の平面図形と比較考察することによって、特定のタイプの形として取り出される。だが、ある人が持つある色の観念は、ロックの考えでは、他の何と関係づけることもなしに端的に、〈その色〉を表しているだけであり、そういう対象として取り扱えば足りる、というのである。ある観念を、このような意味で実定的 positive であるとする場合、それを〈白の〉観念であるなどと呼ぶかどうかは、大事ではない。何と呼ぶにせよ、とにかく〈その色〉なのである。ロックの意図では、このような扱い方さえするならば、観念は、〈外なる事物の《心の外における》現れ〉であると受け取られてもかまわない。

このような一風変わった物言いをするのは、じつは、ロックに次のようなもくろみがあるからである。おなじ 96 節のすこし前のところでロックはこう言う。

引用3 「われわれは、それら〔感覚の単純観念〕を、実定的なもの (positive things) と考えなければならない。感覚に関する未知の哲学的原因 (the unknowne philosophical cause) は、われわれが受け取った観念において思念 (consider) されてはいないし、探求される必要もないのであって、観念そのものとそれを産出した感覚的対象だけを考察し、探求すればよいのである。人類のうち大部分の者は、自分たちがそれを見たとき白と呼ぶところのものの本性が何に存しているか、などということに頭を悩ませてはこなかった。だが、そういう者たちも、哲学者と同じ感覚を知覚するのである。すなわち、哲学者は、白の本質や本性や形相性 (the essence nature or formality) を探し当てたと信じていて、そういったものがどうやって白の感覚を産み出すのかも探し当てたと信じているのだが、そういう哲学者が持つのと完全に同じ白の観念を、無学の者たちも持っているのである。(B§ 96, pp.215-6)」

観念を実定的 positive であると言うことによって、ロックがねらっているのは、要するに、スコラ学者流の「哲学的原因」の考察や探求を排除することである。われわれが、自然を探求するとき、研究対象とさるべきなのは、「観念そのものとそれを産出した感覚的対象だけ⁽⁷⁾」であって、あれやこれやの哲学的議論の中で、いろいろに比較考量される本性や形相ではない。そういった哲学的議論は、感覚的に受容される観念の実定的 positive な中身に何の影響も与えない。そして、あれこれの比較考量を切り捨てて実定的 positive な中身だけに着目するのな

らば、「観念それ自体は、知性の中にあるものとして考えられようと、われわれの外なる事物の〔心の外における〕現れと考えられようと」どちらでもよい。これが『草稿B』96節の奇妙な一文が述べていることである。

2・2 『人間知性論』第2巻第8章から

刊行された『人間知性論』において、『草稿B』96節に内容上対応するのは、第2巻第8章である。感覚の単純観念を、原因とは関わらずに実定的 positive なものとして捉えてよい、ということ、第2巻第8章第1節に出てくる。

引用4 「一つの単純観念は、その外的原因 (the external cause of it) が何であれ、われわれの識別能力によって気づかれる (be taken notice of) ようになったときは、心はそれを、ほかの何にも劣らないほどに知性における実在的で実定的な観念 (a real positive Idea in the Understanding) と見なして考察してよい。(2-8-1)」

実定的 positive に対比されているのは、第2巻第8章第1節以下では、関係的という言葉ではなく、欠如的 privative という言葉であるが、ロックの言おうとすることは違わない。背景になる因果的説明を排除して捉えれば、すべての観念は実定的 positive だ、ということである。

ロックは白と黒を例にとる。白と黒の観念は、観念としては両者とも同じだけ実定的 positive であるが、外界の対象においては黒は一つの欠如 (a privation) にすぎないかもしれない、のである (2-8-3)。自然学に立ち入ることは本意でないとしながら、観念は感覚器官の動物精気の運動状態に依存するから、何かの欠如によってその運動状態が変化させられるのなら、それで黒の観念を与えるのに十分である、などといった説明を試みる (2-8-4)。とはいえ、ロックが伝えようとするのは、むしろ、因果的説明はどうでもよい、ということである。「こういった説明が本当であろうとなかろうと (2-8-5)」と言って、自然学的因果説明をみずから無効にしてしまう。そして、たとえば、人間の影は、光の欠如 (absence) にほかならないが、見ている人間の心の中では、光に照らされている人間その人の観念と同様に明晰で実定的 (clear and positive) な観念である、と指摘する (2-8-5)。こういった言葉が伝えていることは、感覚の単純観念は因果的説明と切り離してそれだけで取り扱ってよい、ということであって、基本的には、『草稿B』96節と変わっていない。

同時に、2巻8章には、『草稿B』96節同様、感覚の単純観念の内在性をやや無視するような物言いも見いだされる。つまり、『草稿B』96節に見られたのと同じく、観念を事物の側のものとして語る一節も見いだされるのである。

引用5 「われわれの観念の本性をよりよく明らかにし、理解できる仕方で観念について語るためには、観念を、われわれの心における観念、つまり、知覚である場合と、そういう知覚をわれわれに引き起こす物体における物質的変容 (modifications of matter in the Bodies) である場合とを区別するのが便利である。(2-8-7)」

ロックの用語法としては、本当は、観念が「物体における物質的変容である」ということはないはずだから、これは、『草稿B』96節と同様に、奇妙な物言いである。ロックは、すぐ続けて、「観念を、事物自身の側にあるものとして私が語っている場合、私としては、それらの観念を生み出す事物にある性質のことを言っていると理解して欲しい (2-8-8)」と弁明する。だから、われわれは、たとえば、ロックの実体論のなかで、

引用6 「……これらの単純観念がどうやってそれ自身で存続できるのか想像がつかないから、われわれは、これらがそこにおいて存続し、そこから結果するようなある基体 (Substratum) を想定するのを常とする…… (2-23-1)」

というような一節を読むとき、単純観念が〈心の中で〉基体のうちに存続するかどうかが扱われている、というようには読まないで、これをただちに、

引用7 「われわれは、馬とか石とかいう実体について、感覚的性質の単純観念の集まりしか持ちはしないのだが、……それらの感覚的性質がそれだけで存続できたり、何かほかの感覚的性質の中で存続したりするとは思われないので、ある共通の基体 (subject) の中に在り、それによって支えられている、と考える (2-23-4)」

というのと同じことを、つまり、前者の〈単純観念の存続問題〉は、後者の〈感覚的性質の事物における存続問題〉のことを言う用語上の便法だと判断する。

引用6が扱っているのは、実体における性質の共存という哲学的に大事な問題である。ロックは、こういう大事な箇所でも単純観念を事物の側のものとして語ってしまうことがあり、それが必ずしも読者の側の混乱を生まない。その理由は、ロックの場合、感覚の単純観念は、そのままそれらを産み出す事物の側の性質に対応することが前提となっているので、観念を心的内在に性質を外的事物に、という具合に言葉上で割りつけても、結局さほどの哲学的意義を生じないという事情である⁽⁸⁾。一般に、内在的对象から出発して、外的対象の存在を証明するというやり方を、ロックは採用しない⁽⁹⁾。言い換えれば、ロックの感覚の単純観念の議論において決定的に大事なのは、観念としての内在性ではなくて、感覚における断片性なのである。感覚の単純観念は、それにまつわる因果的・理論的説明の体系とは独立に、それだけ取り出して

扱ってよいような対象だ、とロックは言おうとしている。説明体系から切り離してもそれだけで何かを伝えている情報の断片が、感覚の単純観念なのであり、ロックはこの特徴を *positive* と呼んだのである。このようなロックの観念説が、どのような学問的状况の中に置かれていたのか、次節で、シドナムの医学論を通じて見てみよう。

3 シドナムの学問観と科学方法論

3・1 シドナムとロック

トーマス・シドナム (Thomas Sydenham 1624-89) はロックの臨床医学の師である。ロックは、1660 年にはすでにボイルと親交を結んでおり、自然哲学全般、なかでも実験的医化学については教えを受けていた (Locke [1976] p.97, n.2 参照。また, Cranston, [1985] p.73-5)。だが、彼が本格的に臨床医学に触れるのは、1667 年にアシュレ卿 (後の第一代シャフツベリ伯爵) の侍医としてロンドンに移り住んでシドナムと知り合ってからであった⁽¹⁰⁾。

シドナムは、ボイルとも親しい間柄で、両者とも真の知識は経験からのみ得られるというベーコン的知識観の信奉者として知られた。だが、ボイルの方が、主として、化学的な手法による新薬調合などの医化学に関心があり、動物実験や死体解剖、解剖死体の顕微鏡による観察、体液の化学的分析、といった当時の新しい学問を病気の原因探求の上で高く評価したのに対し、シドナムは、患者の病状の推移経過の巨視的観察に基づく対症療法的な治療技術の改善や、発熱周期による熱病の分類といった厳密に臨床的な分野のみを医師の職分と考えた点に、両者の相違がある (Dewhurst pp.64-5)。また、シドナムは、生粋のピューリタンであったから、王政復古期の政治社会情勢は一般に彼に好都合ではなく、ロンドン王立協会にも加入することはなかった。

近代的な意味での臨床医学は、シドナムによって始まったと言われる⁽¹¹⁾。当時、医療行為とは、貴族階級に属する人々の侍医が、その仕える貴族個人の体調の異常を、ガレノス等の古式医術に則って元通りにする処置として理解されていた。これに対し、シドナムは、政治上の理由から貴族の侍医となる道を閉ざされており、天然痘や麻疹や赤痢といった伝染性の疾患に侵された比較的貧しい人々を多数診察することを余儀なくされたから、おのずと、病気とは、個人の自然本性に偶発的に生じる異常事態であるというよりも、複数の人々を通じて同一の経過をたどりながら患者の治癒もしくは死亡へといたる一つの自然種的存在としてある、と見るようになった。シドナムは、医師にもかからずに案外治ってしまう一般大衆を見るにつけても、それまでの治療法を大胆に変更して患者の経過を観察する、といった一種の実験的治療を行なうことができた。このような実験は、もとより貴族の侍医にはできるはずもなかった。

ロックは、シドナムと 1667 年に知り合ってから 1672 年ごろまでの間に、とりわけ親しく教えを受けたい (Dewhurst p.34)。以下にその数節を紹介するシドナムの著作『医術につい

て (De Arte Medica)』および『解剖術 (Anatomie)』は、前者は 1669 年に、後者は 1668 年に成ったと考えられるが、いずれもロックの筆記による手稿が残されている。ちなみに、ロックが『人間知性論草稿 A, B』を書いたのも、シドナムに親しく教えをうけていたこの期間中の 1671 年である。

3・2 シドナムの学問観

シドナムの学問観は、次の一節に明らかである。自然の隠れた原因を見破るという身の程知らずの欲求に身を任せないように気をつけ、経験と観察と実地作業を勤勉に果たすことが勧められている。

引用 8 「役に立つ技芸 (useful arts) の始まりとその進歩や、人間生活への援助となる事柄は、すべて、勤勉と観察とに由来する。真の知識は、経験と理性的操作 (experience and rationall operations) によってこの世界に現れる。こういう学問のやり方が続けられて来ていたら、そして、すべての人の思慮分別が、他人の得た観察に自分たちの試みをつけ加えることに用いられていたら、医術も他の技芸も、今よりもずっとよい状態にあったに違いない。しかし、高慢にも、人は、自分が獲得できる有用な知識には満足せずに、事物の隠れた原因 (the hidden cause of things) をどうしても見破りたいと思い、自然の働きについて自分の原理を置き、公準を打ち立てるのが常であった。そして、自然が、というよりも本当は神自身が、人の作った公準の命ずる法則に従って進んでいくと期待して、結局、全く得るところはなかったのである。('De Arte Medica', Dewhurst, p.81-2)」

このように言うのは、シドナムによれば、人は、もともと自然全体を理解し尽くす能力を与えられてはいないからである。

引用 9 「人の狭く弱い能力は、目に見える外的な原因 (visible and externall causes) が産み出す諸結果の観察と記憶以上には届かないであろう。……この世界の巨大で興味深い構造、つまり全能なる存在の行なった仕事は、これを創った知性以外によっては完全には理解できないと考えることは、決して不合理ではない。('De Arte Medica', Dewhurst, p.82)」

この二つの引用から、隠れた原因を追い求めることへの批判と、目に見える事実を観察し記録することの大事さが、対照的に浮かび上がってくる。もちろん、目に見える事実には人間の知性はきちんととどくのである。この目に見える事実は、ロックの言葉に直せば、感覚の単純観念となる。それはまた、ロックにおいて、目に見えない因果的連関を顧慮せずに扱ってよ

い実定的 positive な対象なのであった。シドナムの見解では、こういう具体的な対象を扱って有用な技芸を開発してきたのは職人であって、哲学者ではない。自然についての知識は、もっぱら職人たちが獲得してきたのである。

引用 10 「最も鋭敏で利口な人々は、慣習と教育とのせいで空疎な思弁にかまけていたから、有用な技芸の改良は、それほど利口でもなく改良の仕事をする機会もあまりない劣った人々にまかされてしまった。こういう人々は、職人たち (mechaniques) という不名誉な名前を与えられている。こういうわけで、世界は書物と論争とで満ちあふれ、知識は全く増えないのに、書物の数は増え続けることになった。各時代ごとに、学問は増大し続けたが、人は賢くも幸せにもならなかった。何か新しい発明がたまに人間生活を便利にするようになったとしても、人は哲学的な思弁 (philosophical speculations) の導きでそういう幸せな発見へと導かれたのではなかった。偶然か、または巧みに計画された実験が、スコラの公準よりも自然の働きの方を時間をかけて考えてきた人々に、そういう発見を教えたのだった。このことについては、農夫、革なめし屋、鍛冶屋、パン屋、染物師、絵師、その他諸々の職人たちが証人である。('De Arte Medica', Dewhurst, p.82)」

引用 11 「ここでは自然の物体についての知識を問題にしており、この種の知識の目的と便益とは人間生活の進歩と便宜と以外ではあり得ない。だから、自然の物体の知識という主題についての思弁は、どんなに興味深く洗練されていて見かけが深遠で堅固に思われても、そういう思弁を追いか求める者に、何かのより上手なやり方や、より簡潔で容易なやり方を教えないのならば、あるいは、新しい有用な発明を見いだすようにしてくれないならば、そういう思弁は知識の名に値しない。('De Arte Medica', Dewhurst, p.83)」

哲学者のおしゃべりを断固としてしりぞけ、実用的な自然の知識のみを称揚するシドナムのこれらの言葉は、形相の探求に無関心な「人類のうち大部分の者」でも哲学者とまったく同じ感覚経験を持つ、という先の引用 3 のロックの言葉より、いくぶんは過激に響く。だが、実地の経験や観察や巧みな実験が、自然の知識の拠り所であるという点では、両者の見解に差異はなかった。実験や観察が必要な場面では、哲学的思弁は何の役にも立たない。医学も、実験と観察に基づく知識として作り上げられねばならない。『解剖術』においては、シドナムは、この新しい学問さえ、旧体制の哲学を批判するのと同じように、難しいことに取り組んではいけないけれども少しも有用ではないと批判した。

引用 12 「解剖術は、ほとんどの病気について、その原因も治療法も教えないから、解剖術が人類の苦痛と病苦を取り除くのに大きな進歩をもたらすとは期待できないと思う。

(‘Anatomie’, Dewhurst, p.86)」

もちろん、外科医にとって解剖術の知識は必須であるし、内科医にも病状の観察や予後についての判断の助けにはなる。だが、解剖によって得られる身体の組織構造の知識が、具体的な治療法の進歩に決定的に役立つことはない。これがシドナムの判定である。

シドナムの解剖術批判の根底には、病気の真の原因が解剖によって観察できるような身体組織の構造には依存していない、という見解がある。患者の容態の推移の巨視的観察が、臨床的処置の唯一の手がかりであって、死体解剖による観察知見は、生きている身体の成り立ちについて何ほども教えるものではなく、顕微鏡を用いた観察も事態を改善するわけではない。解剖術も、病気の隠れた原因を見破ろうとする無益な試みの一種と見なされたのである。

3・3 シドナムの科学方法論

シドナムの考えを整理してみよう。解剖術批判に関係して、医学的探求の方法と対象を分類してみると、次の三つの水準が区別されねばならないことが判る。

- (1) 患者の容態の外からの観察という臨床観察の水準
- (2) 死体解剖による身体内部の観察の水準（顕微鏡を用いた器官観察も含む）
- (3) 病気の真の原因が作用している感覚不能な水準

シドナムの考えでは、(1)の臨床観察だけで治療に十分なのであり、(2)の解剖観察は(1)の臨床観察よりすぐれた臨床医療上の洞察を与えるわけではない。その理由は、(2)の解剖観察は(1)の臨床観察同様に(3)の真の原因の水準には届かないからである。(2)の水準と(3)の水準の関わりについて、次のように語られる。

引用 13 「自然が身体に作用するのは極めて微細で感覚不能な (minute and insensible) 部分によってであるから、思うに、顕微鏡その他どんな発明の助けを借りようとも、誰も、そういう微小な部分を見ることができようになると希望を抱いたりはしない。これは確実で、論争の余地の無いことである。(‘Anatomie’, Dewhurst, p.85)」

まず、注意すべきことは、シドナムの観察重視の立場は、存在するものを観察可能なものに限定する後の時代の実証主義とはまったく別物だということである。ボイルほど熱狂的ではないが、シドナムも微粒子説を採用している。そして、この引用 13 では、シドナムは、身体部分を構成する微粒子 (particles) が微小すぎて見えないと言っている。しかし、シドナムが解剖による観察を退けるのは、微粒子が見えないからだけではない。そうではなくて原因は感覚できないからである。

引用 14 「勤勉な解剖学者でも……適切な部位で適切な比率において身体の使用と保存のために作用している体液を、自然がどのようにして (how) 作っているのか、というようなことを見ることはできない。そうであるとすれば、彼は、解剖を繰り返すことによって立派な解剖学者にはなるかもしれないが、よい医師にはなれない。というのも、解剖した部位の正確な働き方 (the very precise way of their [the parts'] working) を知覚しないまま、その部位を凝視するということは、いまだ表面的な (superficial) 知識にしかすぎないのである。われわれは内部に切り込んでいくが、事物の外側しか見はしないし、むしろ自分自身が見つめるための新たな表面 (a new superficies for ourselves to stare at) を作り出しているだけなのである。('Anatomie', Dewhurst, p.88)」

引用 15 「確かに、われわれは、胆汁と尿とがそれぞれ肝臓と腎臓から出てくるということを見るし、胆汁と尿が肝臓と腎臓の作るものであることも知る。だが、そのことによって、一步でも、そういった臓器の働きの原因や様態 (the cause [n] or manner of their operation) に近づいたわけではないのである。('Anatomie', Dewhurst, p.87)」

ほとんど同じことを、引用 14 は一般的に、引用 15 は具体的に語っている。引用 14 の「働き方 (the...way of...working)」とは、引用 15 の「働きの原因や様態 (the cause or manner of...operation)」と同じことである。この二つの箇所が述べているのは、解剖学者は、少しも身体作用の内的原因の把握には届きえずに、いつまでも臓器の表面を見つめているだけであり、どれほど微細な水準に切開が達しても、そこにあるのは「事物の外側」の「新たな表面」にはかならない、ということである。観察を繰り返すことは、たかだか新たな外側を見つめることにすぎず、内なる原因が発見されるわけではないのである。

かくして、シドナムは、解剖学者を批判することを通じて、観察を重視するという自分の科学方法論がどういう限界を持つのか、ということ为期せずして語っているように見える。顕微鏡をいくら使おうと病気の原因が見えるわけではない、という解剖学者への批判は、事実としては、当時の光学技術の限界や病理学の知識の不足を示唆している。しかし、他方で、方法論の問題としては、断片的事実の観察報告は、それだけでは病気の原因や症状の推移に関する有益な情報とはならないということも示唆している。断片的な事実は、一般化され、体系的に関係づけられて、はじめて有益な情報となる。それなしに顕微鏡で微細な観察を試みても、たしかに、ものの外側を眺めているだけのことである。つまり、シドナムは、観察報告というものの一般の限界を期せずして指摘しているわけである。

そこで、シドナムに対して、次のような批判を組み立てることができる。

そもそも原因とは、端的に感覚されるような何かではない。因果関係は、観察事実の背後に想定される何かであって、観察可能な諸部分の位置関係や動きそのものとは水準が異なる存在

である。因果関係は、感覚経験〈について〉の予測や判断や説明の水準に成り立つのだから、断片的感覚経験そのものではない。すると、問題は顕微鏡的観察だけに限られないことが分かる。シドナムが主張するような臨床的観察も同じ問題を抱えているはずである。たとえ漠然としたものではあれ、断片的事実を結びつける仮説的見通しは不可欠であり、やみくもに事実を集積しても何も判らないし、結局は病気の治療に役立ちもしないはずである。

理論を重視する現代の科学哲学の立場から、こういった批判をベーコン的方法論に突きつけることは、しごく容易であろう。

このような批判は、じつは、歴史的な文脈をよく見れば、当たっていないことがわかる。まず第一に、原因を知覚するということの意味の理解について、こういう批判は時代錯誤をおかしている。原因を知覚するということでシドナムが言おうとしていることは、われわれの思いつくこととは少し異なっている。われわれは多かれ少なかれ実証主義的因果観の影響を受けている。だから、原因を認識する手続きを、たとえば、複数の事象群の相関性を手がかりに、要因として作用しているらしい事象タイプを発見する、といったこととして捉えがちである。シドナムは、こういうことを考えているのではない。先の引用9の主張、世界全体の成り立ちを包括的に理解できるのは創造主自身だけである、という主張が思い起こされるべきである。シドナムにとっては、〈原因を知覚する〉ということは、おそらく、神のように、自然の内なる原因の働きを完全に把握することなのである。そして、このような知を望むことが学問の発展をむしろ阻止してきた、というのがシドナムの意見である。原因を知覚する可能性を退けるのは、思弁を退けるのと全く同じ趣旨である。解剖を繰り返しても神のごとき知が得られるわけではない。

第二に、理論的見通しを欠いた感覚経験が何も告げないという批判は、それ自体としては正しい主張であるが、シドナムに対しては見当はずれである。シドナムが残した病気の症状の観察や治療法の実験の記述を見ると、われわれが考えるような意味における因果性の把握は決して稀なものではないし、断片的事実は慎重に関係づけられて、病気の像を的確に描き出すように意図されている。空想上の実証主義的禁欲を、現実のシドナムの実践に押しつけても批判としては意味をなさない。

たとえば、シドナムの天然痘治療の新機軸は、従来の、ワインやブランディといった強壮剤で患者を温める温熱療法や、発汗促進といった治療法を一切やめて、天然痘患者に薄着をさせ、ベッドから起きさせ、身体を冷やす、というやり方であった（Dewhurst, op. cit. p.106）。シドナムによれば、この新治療は成功だった。そして、天然痘は春の終わりに流行がはじまり、暑くなるにつれて猛威を振るい、致死率は蒸し暑い夏に最高に達する病気である。というわけで、彼はこう言う。

引用 16 「血液が濃厚で活力があり、それを強壮剤で火照らせる (inflare) 必要などない

春の時期にはじまる病気は、温熱療法や加熱治療で治るということは全くないか、あるいは、殆どない。このことは、今後、誤った無内容な観察 (observation) ではないとわかるだろう ('Small Pox', Dewhurst, p.107)。」

シドナムが引用 16 で「観察」と名づけているものは、明らかに、原始的な因果的予測ないし仮説である。シドナムは事象の相互関連の推定を差し控えたりしていない。それを「観察」と呼ぶだけなのである。一方、こういう「観察」に含まれている観察者の能動的な関与を、ひとしなみに「理論」の働きに帰することは難しい。この場合、はっきり取り出すことのできる「理論」が、シドナムの側に何か見いだされるとは思われない⁽¹²⁾。シドナム自身の体験としては、病状の変化や治療の効果の推測は、〈そうなると思えない〉という抜き差しならない判定として、いわば、自然の側から自分にもたらされる、と感じられたのではないだろうか。熟練した実験家や技術者が行なう観察は、たぶん、このようにして成り立つのである。

シドナムによれば、天然痘 (small pox) には二種類があって、一つはデスティンクト・ポックス (distinct pox) いま一つはフロックス・ポックス (flox pox) である⁽¹³⁾が、この両者について、彼は、最初の症状がどのように現れて、身体のどの部位が痛み、どのような発疹を生ずるか、事細かに報告する。そして、フロックス・ポックスについて「これはある時は丹毒のように見えるし、ある時は麻疹のように見える。フロックス・ポックスをこれらから区別するには、非常に経験を積んだ医師でなければならない ('Small Pox', Dewhurst, p.111)」などと言う。さらに、二種の天然痘に真に固有に属する現象と不規則に偶発的に属する現象とを区別しつつ、デスティンクト・ポックスでは発症から八日目前後、フロックス・ポックスでは十一日目前後に患者の死亡する例が多い、といった観察を報告している。こうした病気の自然誌の試みからは、記述を通じて獲得される分類が、全体として病気の識別に役立つように、経験を積んだ観察者が、臨床的に見いだされる種々の特徴を、きわめて注意深く寄せ集めていく様子が浮かび上がってくる。

シドナムは、治療に役立つということを自分の医学方法論の中心に置いたから、スコラ的思弁も顕微鏡観察も、ともに隠れた原因の無駄な探求として退けた。だが、彼の臨床観察自体は、病状の推移や治療の有効性に関する因果的予測をもちろん排除しなかったし、また、観察は熟練した臨床医だけが適切な洞察をもって有効に遂行できるような一種の専門的技術なのであって、単なる感覚経験などではなかった。断片的観察報告は、治療行為を通じて医師の身に備わるに至った病像の分節化の技術によって、おのずと体系づけられ、自然に病気の推移を告げるようになる。そのようにして整理され分類された病気の症状や経過は、自然自体が観察者に告げた事実として受容されるのである。そして、おそらく、顕微鏡による観察とその報告は、未成熟な新技術であって、臨床医が自分の診療に生かすために取り込むことができるほどには、臨床上の知見と結びついていなかったのであろう。

以上のように、シドナムの方法論は、観察そのものの中に、熟練した医師の臨床治療の場での経験が織り込まれていくという要素を持っている。熟練技術者の知を高く評価し、思弁を排除して実験と観察を重んじるという態度を、シドナム自身の言葉に即して理解すれば、観察や実験が平板な感覚的受容に還元できないことが分かる。次節では、感覚の単純観念を断片的対象とするわれわれのロック解釈を、もう一度、この背景の上で検討してみることにする。

4 感覚の単純観念の成立

4・1 「感覚の単純観念」に関する解釈の課題

第2節でわれわれが確認したことは、感覚の単純観念とは、なによりもまず、因果的・理論的説明の体系から切り離してそれだけを取り出すことが可能な断片的対象である、ということであった。他方、第3節で確認したことは、旧来の医学体系を否定するシドナムの臨床医学の立場とは、病気という自然種を観察し分類し、経過の推移を予測するという実践への熟練を求める立場である、ということだった。感覚の単純観念が体系的相関を捨象した断片的対象として成り立つということは、旧来の医学体系を離れて臨床的に観察される事象が医学的認識と医学的实践の上で固有の価値を持つ、ということの哲学的な言い換えになっている。

この節では、感覚の単純観念は断片的対象であるというとらえ方が、解釈上の困難を解決するのに役立つことを示す。感覚の単純観念は、二つの特徴を備えている。一つは、与えられる、という特徴、もう一つは、より以上に分析できない様な見え姿である、という特徴である。この二つの特徴は、両立しがたいと受け取られてきた。たとえば、与えられた視覚野は、あきらかに多様な対象からなる複合的な見え姿をとる。逆に、たとえば、金という物質の〈王水に溶ける〉という性質を、ロックにならって単純観念と見なすとき、これは単一ではあるかもしれないが、端的に感覚に与えられていると見なすのは難しい。金細工師や錬金術師や化学者は、一定の手続きに従って、この性質を見いだすことができるだろうが、それは実験作業を経て作り出された結果であって、端的な感覚への所与とは異なる。

ところが、ロック本人は、のちの注釈家がしばしば指摘するこの明らかな困難を⁽¹⁴⁾、気にもとめなかったようである。『人間知性論』の中にこの二つの特徴を整合的に提示しようと努力している箇所は見つからない。以下では、感覚の単純観念を断片的対象としてとらえるわれわれの解釈を手がかりとして、所与性と一様性とは両立することを示そう。感覚の単純観念の所与性の記述から、どのような経過を経て様な身え姿としての感覚の単純観念に到ることができるか、ロックの記述を追って行くことにする。

4・2 刺激と判断

感覚の単純観念が所与であることは、次のような文に明らかである。

引用 17 「これらの単純観念は、心に提示される (offered) とき、知性は、これを拒んだり、変えたり、刻印された (imprinted) ときに消してしまったり、新しいものを作り出したりする事はできない。それはちょうど、鏡が、その前に置かれた対象の産み出す画像つまり形象 (ideas) を拒んだり、変えたり、抹消したりできないのと同じである。(2-1-25)」

単純観念が、'offer' されたり、'imprint' されたりする客体的な何かとして語られていることは、観念をめぐる言葉遣いの問題として興味深い。また、鏡をたとえに持ち出した部分で、'ideas' という言葉が、ギリシア語の原義である「姿形」という意味あいを色濃く残して用いられていることにも注目してよい。物体における微粒子の内的構造を理論的对象として導入して語る文脈以外では、ロックの言う感覚の単純観念は、しばしば、外から運び込まれたり、提示されたり、刻印されたりする姿形なのである。

一方、感覚の単純観念が非複合的な見え姿であるということは、引用 16 にすぐ続いて次のように示される。

引用 18 「人が一塊の氷に感じる冷たさと堅さは、ユリの花の匂いと白さや、砂糖の味とバラの香りが別個であるのと同様に別個である。これらの単純観念の明晰判明な知覚 (perception) ほど、人にとって明白なものはほかにない。これらの単純観念は、複合されていないので、心における一様な見えないし把握 (one uniform Appearance, or Conception in the mind) しか含んでおらず、異なった複数の観念に分けていくことはできない。(2-2-1)」

ロックは、観念のうちのあるものは単純で、あるものは複雑である、といって分類を始める。だが、意外なことに、感覚的受容の単純性を述べようとするときに、まず最初に対比されるのは、複雑「観念」ではなくて、対象における「性質の複合」である。

引用 19 「われわれの感覚を刺激する性質群は、結合し混合していて (united and blended), 事物自身においては分離や距離はないが、それらが心に産み出す観念は、感覚を通じて単純で混合しないで (simple and unmixed) 入ってくる (enter) ことは明らかである。(2-2-1)」

従来 of 解釈者は、この性質群の複合同い事実 to 軽く触れはしても、さほど注意を払わなかった。しかし、われわれは、第 2 節で関係的 relative と実定的 positive という対比の意味するところを確認した。対象の側で関係的であっても、受容した観念はそれだけ独立に実定的なものとして扱ってよい、というのがロックの主張であった。そして今、ロックが「単純」とか「心

における一様な見え」と言うとき、まず引き合いに出すのは対象における性質の混合という事態である。すると、観念の単純性を語るときロックが暗黙のうちに念頭に置いていることは、おそらく、知覚的に一様に見えるものが、対象においてはそれ自体複合的（關係的）で有り得るけれどもそのことは気にしなくてよい、ということであると判定がつく。

重ねて注意しておけば、ロックは、観念の内在性に立脚して外界を捨象しているのではない。感覚的な受容がそれ自体で伝えていることに着目して、それについての理論的体系的説明を切り捨てているのである。たとえば、固体性（solidity）という単純観念が何であるか知りたい、という者がいるなら、フットボールを手の間に挟んで押しつけてみればよい、とロックは言う（2-4-6）。これが固体性とは何であるかについての最もよい説明であって、これ以上に固体性が何に存しているのか知りたいと思っても無理なのである。

引用 20 「われわれが持つ単純観念は、経験がわれわれに教えるものである。それを越えて、単純観念を言葉によってもっと明晰にしようと努力しても少しも成功しない。（2-4-6）」。

諸部分の凝集がどのようにして固体性という物質の基本的性質を形成しているのか、ということは、思考という精神の基本的性質を成しているのは何か、ということと同様に、われわれの理解を越えている。だから、固体性の感覚的な受容は、思考体験の反省的把握と同様に、われわれの理解のとどき得るかぎりまで、もっとも単純な、それ以上の分析を拒むような情報の断片なのである。（2-23-29 参照）。

このように、感覚的な所与が単純であるというときに対比されているのは、知覚野の複合性であるというよりも、むしろ、自然的事物の性質群の複合性である。氷の冷たさと堅さはどちらも触覚を通じて得られる。対象としての氷においては、これらは結合されているのであろう。だが、われわれにおいては、冷たさと堅さが別個な感覚的な受容として切り離して（実定的 positive に）取り出される。それが経験の教えるところであるから、それを越えて言葉によってさらに説明していても——つまり、より〈根源〉的なものへと分析を進めようとしても——混乱を生じるだけで、得るところはない。ロックはそう言いたいのである。

では、懸案の所与性と一様性は、うまく折り合いがつかだろうか。今まで、解釈者を悩ませてきたのは、〈知覚野の複合性が与えられているのは経験上明らかなのに、与えられているものは複合されていないとロックが言っている〉という明白な矛盾であった。だが、われわれは、これを〈対象の性質群の複合体が刺激として与えられているが、受容された観念は複合されていない〉という事態に読み換えた。その結果、所与性と一様性の不両立の解消は格段に容易になった。われわれの課題は、対象の性質群の感官への刺激から始まって、感覚的な受容が成立するまでの、知覚の因果的過程のどこかで、与えられる性質群の複合性が、単純観念の一様性

にすり変わる場面を探し当てればよい、ということにすぎない。

ロックは、物理的刺激と感覚的受容の関係について、順を追って議論を展開している。それは、人間の認知能力の発達という心理学的問題である。最も根本的な指摘は以下である。

引用 21 「身体にどんな変容 (alterations) がもたらされようと、それらが心に到達しなければ、また、外的部分どんな刻印 (impressions) が与えられようと、内側からそれに気づかなければ (take notice of), 知覚はない。(2-9-3)」

何かに集中しているときには周囲の雑音が聞こえない、というようなことは、誰もが経験することである。これはすなわち、「通常なら観念を産出するものが、器官を通じて運ばれるのだが、知性において何ら気づかれないうために、心の上は何らの観念も刻印せず、従って感覚が無い (2-9-4)」ことになる」と説明される。このような気づきはいつ始まるのだろうか。ロックによれば、それは胎児の時である。

引用 22 「私は疑わないのだが、子どもは、子宮の中にいるときに彼らを刺激する諸対象に対して感覚を働かせることによって、誕生前でさえいくつかの観念を受け取っている。そういう観念は、周囲の物体からの避けがたい結果であるか、あるいは、子ども自身が持つ欲求や不快感の避けがたい結果であるかのいずれかである。(2-9-5)」

胎児の感覚としてロックが想定しているのは、飢えと温かさである。胎児が飢えるというのは、ややわかりにくいだが、温かさはたしかに胎児も感じるかもしれない。胎児の感覚内容に、今日の知識から、母親の心音を加えてもよさそうである。胎児の身体内外の物的環境は複雑きわまりないだろうが、胎児にとっては、それは温かさと飢えと心音ぐらいに集約される。この刺激の集約の事実が、受容されたものが単純ないし一様であるということである。この能力をロックは、識別 (discerning) と呼ぶ⁽¹⁵⁾。このことは引用 4 にすでに出ていた。すなわち、

引用 4 再録 「一つの単純観念は、その外的原因が何であれ、われわれの識別能力によって (by our discerning Faculty) 気づかれる (be taken notice of) ようになったときは、心はそれを、ほかの何にも劣らないほどに知性における実在的で実定的な観念と見なして考察してよい。2-8-1」

この識別の能力は、あらゆる知識の基盤である。

引用 23 「心にあるいくつかの観念の間で識別 (discerning) し、区別 (distinguishing)

する能力にわれわれは気づく。何かあるものについてのざっぱで混乱した知覚を持つだけでは十分ではない。さまざまな対象の諸性質についての判明な知覚を持つのでない限り、心はごく少しの知識しか持つことができないだろう。(2-9-1)」

別個な観念をそれぞれ同定する能力は、人間の生得的な能力である。複合的な物的刺激は、「知覚と区別という心の生まれつきの能力 (4-1-4)」によって、分析されて一様な見えに帰着する。この能力の行使は、身体的な訓練を含むだろう。たとえば、生まれ落ちた人間の子どもは、まだ視覚が完全ではない。新生児は、見ることを学ばなければならない。筋肉を使ってレンズの厚さを変え、焦点を合わせることを学んで、そうやってはじめて、複合的な光の刺激を、たとえば、ある色をしたものの表面という視覚像として確定することを学ぶ。さらに、こういった過程は、身体運動や触覚、聴覚等々のあらゆる感覚に起こり、諸感覚相互の統合も形成されるだろう。子どもの認知能力の発達を完全に述べることは困難だが、いずれにせよ、それは、与えられる物理的刺激の複合体を、必要に応じて識別していった、ある一つの感覚的受容として同定していく能力の発達であると言ってよいと思われる⁽¹⁶⁾。

このような能力の発達は成人に達するまで続けられる。その結果として次のようなことが起こる。

引用 24 「感覚によって受け取る観念は、成人の場合には、しばしば判断 (judgment) によって変容を加えられており、私たちはそれに気づかない。(2-9-8)」

ロックが取り上げるのは、一様な色の球体が眼前に置かれたときの感覚経験の例である。

引用 25 「金とか雪花石膏とか黒大理石でできた一様な色の球体を目の前に置いたとき、それによってわれわれの心に刻印される (imprinted) 観念は、確実に、いろいろな程度の光と輝きをともなって目に到達する多様な陰影をもった平らな円の観念である。ところが、われわれは、凸面体がどのような見え姿 (Appearances) をわれわれに作り出すかを、また、物体の感覚できる形の違いによって光の反射にどんな変化が起こるかを知覚するのに慣れてしまっているので、判断が、習性となった習慣によって (by a habitual custom)、ただちに見え姿を原因に変える (alter[s] the Appearances into their Causes) のである。2-9-8」

この箇所でのロックの言葉遣いは、やや誤解を招く。ロックは、本当に見えているのは円なのだが、人は、ある見え方をする円はじつは凸面であることを学んでいるので、人の方で、この円の観念を球の観念に変えるのだ、といった言い方をしている。引用 24 では、感覚の観念が

心にあつて、しかし、それには人は気づくことがなく、むしろ後でそれに変更を加える、という仕組みがあるかのように述べている。この言い方は、文字どおりにとると、〈われわれの気づいていない観念がわれわれの心の中にある〉という主張を含意する。これは、生得観念を批判する際には、「心に何かを刻印する (imprint) が心はそれを知覚しないというのは、私には理解しがたい (1-2-5)」といてロックによって退けられた考え方である。

〈気づかれない観念〉という矛盾を強いなくても、ロックの記述している事態は理解可能である。ここで述べられていることは、要するに、まず知覚的見えの原因である球体があつて、そこからの光の刺激を、最初は——たとえば乳児は——円として見て、続いて、それを球体として見ることを学ぶ、という認知の発達にすぎない。円の知覚から球の知覚へというこの視覚の発達心理学は、現在では文字どおりには支持されないかもしれない。しかし、われわれの解釈にとって重要なのは、刺激を分析し解釈する能力の発達という構図だけである。この構図自体は誤りではないと思われる。ロックは、ここで、刺激を受容し、識別し、同定する能力の統合的な発達について語っていると解釈してよいであろう。

引用 26 「このことは、私たちがしばしば経験する事物においては、多くの場合、定まった習慣によって、一定の仕方で、非常にすばやく起こるので、それを感覚の知覚であると、〔すなわち、感覚が捉えたものであると〕とってしまう。しかしそれは私たちの判断が組み立てた観念なのである。だから、一方、つまり感覚の観念は、もう一方〔判断の観念〕を喚起するのに役立っているだけなのであり、感覚の観念は、それ自体気づかれることはまずない。それはちょうど、注意深く読んだり聴いたりしている人が、文字や音にはほとんど注意を向けず、文字や音によって喚起される観念の方にだけ注意するのと同様である。(2-9-9)」

この箇所の言葉遣いも、先の引用 24 と同様の誤解を与えうる。〈気づかれずに〉心にある感覚の観念が、いわば引き金となつて、判断の介入を招く、という言い方が見られる。だが、末尾の比喻はもう少し筋の通つたものである。本を読んでいるときに文字にはいちいち注意を向けず、意味の方にだけ注意する、という比喻が示唆するのは、意識の辺縁部に感覚の観念が追いやられ、意識の焦点には判断がつくりだした観念が来ている、という配置である。この比喻は、〈気づかれない観念〉という矛盾を含まない。この場合は、感覚の観念は、何らかの意識の配置の変換が起これば、それとして再認できる対象である。たとえば、球体の知覚があるとき、なんらかの努力ないし訓練によって、それを平面的な円の知覚として見るができるようになる、といった状態を想像すればよい。球から円が見えるようになるにせよ、円から球が見えるようになるにせよ、ここで語られているのは、われわれの感覚機能が経験を積み、訓練を経て、さまざまなやり方での刺激の識別と同定の仕方を学んでいくという事実である。このよう

な感覚的同定能力の発達に応じて獲得されるそれ以上は分析できない情報の断片が、感覚の単純観念なのである。

4・3 構成単位としての感覚の単純観念

感覚の単純観念には、それを受け入れるとき、知性が「まったく受動的 (2-1-25)」であって、「新しい単純観念を発明したり作り上げたりはできない (2-2-2)」, という側面もある。この側面は、所与であるという特徴の系とも言える。しかし、上で試みたように、心の識別能力に応じて獲得される断片的な対象として感覚の単純観念を解釈すると、まったく受動的であるという規定には反することになる。

しかし、引用 21 で確認したように、ロックの意見では、心の側が気づかなければ、どんなに物理的刺激があっても観念はない。とすれば、単純観念がある以上は、気づくという能動性が心の側で発動されていなければならない。また、気づくということは、他のものから区別して同定することと同義だから、結局これは識別能力を発動する、ということに帰着する。

受動性を、識別能力さえ発動されていない状態と理解するなら、真に受動的な過程は、対象の諸性質からの刺激の受容と伝達という生理的過程だけに限定されるだろう。引用 17 についての説明で注意したように、ロックは、単純観念そのものが、物的な姿形のように心に押しつけられる、という用語法をとることがある。その場合は、たしかに純然たる受動性があるといってよい。だが、ここで受動的なのは、心ではなくて感覚器官つまり身体である。そして、このような場合は、たしかに、引用 24 や 26 でロックが言うように、押しつけられた単純観念（つまり、物理的刺激）に、心は気づかないということもあってよい。

われわれは、4・2 節で胎児から始まって成人にいたる感覚機能の発達過程を、ロックの言葉に則して簡単に整理したが、そのときわれわれが着目したのは、識別能力のみであった。識別能力を発動しているというかぎりでは、心は完全には受動的でない。しかし、受動的という言葉を用いて、識別さえ行なわないという意味に解するなら、心は心であることをやめるほかはない。誕生前の胎児の心ですらないのである。したがって、純然たる受動性は、刺激を身体が受け取る生理的な側面に限定し、識別能力の発動は感覚経験を持つための——あるいは、一般に、観念を持つための——必要条件として受け入れてよいであろう。

識別能力を感覚経験の必要条件として受け入れた場合、感覚の単純観念の説は、当時の自然科学上の知識の基礎づけの役割をある範囲で果たすことになる。すでに第 3 節のシドナムの科学方法論に関して確認したように、与えられた事象に新たな分節を作り出して対象の同定や分類を形成していくことは、17 世紀後半における重要な科学的活動であった。激しい発熱をとまなう病気を、発熱の周期によって分類しようとしたシドナムの試みなどは、典型的に、与えられた漠然たる事象に分節を見いだしていく作業である。シドナムによれば、自然の事物について役にたつ知識を得てきたのは、「勤勉と観察と……経験と理性的操作 (引用 8)」を通じて「他

人の得た観察に自分の試みをつけ加え（同）」ることを怠らなかった人々だった。

感覚の単純観念は、混合された所与の中の、単純でそれ以上は分析できない単位に気づいて識別することによって獲得される。識別の能力は、胎児の頃から成人に至るまで続く知覚的学習を通じて洗練され、より役立つようになる。そして、この洗練は、臨床医や職人的な専門家の訓練と同型である。シドナムの「観察」概念が、因果的な予想や、過去の経験からの推測を包み込む概念であったように、ロックの「感覚の単純観念」という概念も、訓練を経た専門家の感覚経験を念頭においた文脈で用いられている。それはロックが、実体の複雑観念の構成単位として単純観念に言及する文脈である。

まず、ロックは、シドナムと同様に、職人の知識や経験を哲学者の言説より高く評価し、そのような経験を通じて得られた単純観念の集まりが、実体の複雑観念であると指摘する。

引用 27 「絵師や染物屋は、白や黒の原因を探求したりはしないが、白、黒その他の色彩の観念を、まったく明晰に、完全に、そして判明に、自分の知性において持っている。たぶん、職人たちは、白と黒の原因をあれこれ考えるのに忙しくしていて、その原因が実定的であるとか欠如的であるなどとよく知っているつもりの哲学者よりも、判明に、白や黒の観念を知性において持っているのである。(2-8-3)」

引用 28 「鉄やダイヤモンドの真の複雑観念を作り上げているのは、そういう実体において一緒にになっている観察可能な普通の諸性質である。こういう性質については、鍛冶屋や宝石商は、一般に、哲学者よりもよく知っている。哲学者は、実体形相についてどんなことをしゃべってしようと、こういった実体において普通に見いだされるはずの単純観念の集まりによって形作られているような実体の観念以外、どんな観念も持ってはいない。(2-23-3)」

引用 27 と 28 は、関連している。27 の方は、物体の個々の性質に関する職人たちの経験的知識が信頼に値するものであること、28 の方は、そのような職人の経験的知識は、観察を通じて諸性質の単純観念を集めることによって獲得されること、を述べている。そして、いずれも哲学者の言説がものの役に立たないことを述べている。この文脈では、感覚の単純観念は、感覚経験の現場での所与というよりも、諸々の物体についての複雑観念を構成する単位として捉えられている。このような構成単位としての単純観念は、注意深い経験を通じて一つ一つ集められるほかはない。

引用 29 「ある名前で示される物の種に属している単純観念、ないし性質の正確な数について、人々は、合意がえられている状態とはほど遠い状態にいる。このことは驚くべきこ

とではない。というのも、同一の〔種類の〕実体（subject）において常に一緒に在ることが見いだされ、自然において恒常的に不可分に結合されている単純観念が、何と何とであり、幾つあるのか、ということを見つけたすためには、多くの時間と、骨折りと、技術と、厳密な探求と、長い吟味とが必要なから。（3-6-30）」

ロックは、自然種の特性をなす単純観念を正確に確定するためには、「多くの時間と、骨折りと、技術と、厳密な探求と、長い吟味」が要ることを指摘している。このようなロックの言葉は、第3節で確認したシドナムの科学方法論と重なっている。技術的な修練と、長い時間と、厳密な吟味を経て、対象が備えている特徴を少しずつ明るみに出していく作業として、自然についての知識の獲得の仕方が語られている。技術的な訓練にもとづいた自然への探求がロックの言う経験なのである。

引用 30 「経験（experience）が、この〔自然の事物の知識の〕分野でわれわれが頼りにするものである。そして、経験がもっと進んでいたらよかったのに、と思わないではいられない。経験というやり方での何人かの人たちの惜しみない骨折りが、自然の知識の蓄積に進歩をもたらしてきたことをわれわれは知っている。だが、他の人々も、なかんづく火による哲学者〔すなわち錬金術師の化学者〕たちが、哲学者と自称するにふさわしいほど、観察において細心で、報告において誠実であったら、われわれの周囲にある物体についての知識も、その潜在能力（powers）や作用（operations）への洞察も、もっと大きかったであろう。（4-3-16）」

一般に、知識のすべての材料は経験から来る、というのがロックの立場であった（2-1-2）。引用 30 は、とくに、自然についての知識は、すべて経験からしか来ないと言っている。実験と観察を通じて、経験に与えられているものをより精密に識別することによって、より正確に自然を知る、という道しかないのである。厳密な正確さは、すでに知られている事柄を簡単に受け入れないで、いちいち自ら確かめていく面倒な操作を通じてしか得られない。知識は経験の現場に還ることによってしか得られないのであり、感覚の単純観念は、その現場で、自然が、探求者の識別の能力に応じて提示してくる所与として出現する。

引用 31 「一つの種に類別され、一つの普通名で呼ばれ、したがって、一つの種であると受け取られる、そうした個物の多くが、それにもかかわらず、その实在の構造にもとづいて持つ諸性質は、相互ではなはだ違っていることがある。それはちょうど、種的に違くとされる他の個物と違うほどに相互にはなはだしく違うのである。このことは、自然の物体を扱う人のすべてが容易に観察できる。なかんづく化学者は、一片のイオウとかアンチモ

ンとか礬類 (vitriol) のうちで、他の〔同じ名前の〕ものに見いだされるのと同様の性質を見いだそうと努力して、にもかかわらずそれに失敗するときに、このことを確信する。……こういった物質は、厳密に調べると、相互に非常に異なった性質を示すので、非常に細心な化学者の期待や骨折りも裏をかかれるのである。(3-6-8)」

ここで、イオウやアンチモンと呼ばれているのは、現在の知識で言えば、異なる各種の化合物全体のことである。だが、当時は、これらの名前のもとに、いまだ弁別されない多種類の物質が、同じものとして分類されていたと思われる。こういう自然種名は、いわば、実在性に疑いがある理論的対象の名前ということになる。化学者は、みずからの技術を駆使して、たとえば、あるイオウに別のイオウで見いだされたのと同じ特性を見いだそうと実験を繰り返し、「期待や骨折りも裏をかかれる」体験をする。この体験を図式的に表現すれば、当該のイオウ x は、イオウ y が特性 f を示すのと同じ状況で特性 g を示す、といったことになるとと思われる。このときに物質 x に関して取り出される特性 g は、 x の複雑観念の構成単位となる単純観念である。

一方、実験室という経験の現場では、特性 g は、化学者の探求の技術と能力に応じて対象が提示する感覚的所与として検出されるはずである。物質の特性の相違は、結局のところ、ある反応過程で、色が変わるとか、重さが変わるとか、爆発するとかいった端的に観察可能な変化、つまりそういう感覚的所与にいずれは帰着するからである。専門家が実験や観察を通じて同定する実体の複雑観念の構成単位としての単純観念は、ある特定の手続きに応じてのみ得られる感覚的所与と同じことになる。

われわれは、所与としての感覚の単純観念の受容を、生理的な受動性と見なさずに、胎児にもあるような気づきと識別の能力に応じた刺激の把握と見なした。多くの人が成長過程で経過するような、眼の焦点合わせの訓練や、両眼視の訓練、奥行き知覚の学習といった感覚機能の洗練の延長上に、種々の知識や洞察や技術を統合して対象に適用していく実験家や観察家の訓練を想定してみよう。すると、この場合は、物質の分類に関わるような特性の把握もまた、感覚の単純観念の受容としてくられることになるであろう。ロックは、感覚の単純観念という哲学的仕掛けを、そのように扱っていると思われる。そうすることによって、自然そのものが教えてくれるとおりに自然を把握する、という立場を主張したのである。

引用 32 「実体についてのわれわれの知識の実在性は、われわれが持つ実体の複雑観念が、自然において共存すると見いだされてきた単純観念のみによって作り上げられているということに存する。(4-4-12)」

5 結び

われわれは、ロックにおいては、感覚の単純観念が、観念としての内在性をカッコに入れて猶予するような取扱いを受けていることを、随所で確認した。感覚の単純観念は、内在的对象であるという側面よりも、感覚的所与として、それだけを理論的説明体系から切り離して取り扱ってよいという、実定的な positive 断片性の方に重点があった。このことは、旧来の医学理論を排除し、臨床的な観察にのみ基づくことを主張したシドナムの医学方法論の、哲学的な言い換えとなっている。

シドナムのいう観察が、熟練した臨床医だけが適切な洞察をもって遂行できるような一種の専門技術であるのと同様に、ロックの感覚の単純観念も、職人的な専門家による対象の識別と同定の作業に応じて与えられる断片的対象である。このような断片的対象を獲得する経路を、ロックは、胎児の段階から始まる感覚機能の発達と洗練の過程として設定している。幼児の感覚機能の発達が、自然物のより精細で正確な感覚的把握と対象の操作の可能性をもたらすように、専門家の技術的能力の発達は、自然物のより精密で正確な感覚的把握と対象の操作の可能性をもたらすと見なされている。

ロックにもシドナムにも見いだされる職人的技術の賞賛は、旧来の理論家たちの争論を一掃すると同時に、実地に体験する人々の認識手続きを、学問として認知する役割も果たしている。ロックにおいては、感覚の単純観念という言葉が、幼児の発達過程での認識対象から、専門家の技術的洗練を通じた認識対象までも覆ってしまう幅広い場面で用いられている。幼児の発達が、認識の成立過程として、哲学的に文句をつけても意味をなさない自然な正当性を持つのと同様に、自然から学ぶ実験家や観察者の技術的修練は、あたりまえの感覚経験と重ね合わされて、そのまま正当化されるものとして提出されている。そのようにして、自然についての知識が実在的であるかないかの決定の基準は自然自体からやって来る、という立場をロックは主張しようとしている。

問題は、幼児から成人に至るまでの感覚機能の発達と、専門家の技術的訓練とがどこまで本当に重なるのか、というところに残っている。判明に言語化される理論や仮説と、端的な実験的データとの中間には、実験室の中で直接伝授されるしかない科学的探求の技術的修練の領域が横たわっている。ロックの感覚の単純観念の説は、その領域に根を下ろすことによって、実験的自然学の知識を正当化しようとした試みだったのである。

注

- (1) 観念 (idea) とは何なのか、ということは、ロック解釈上議論が絶えない問題である。センス・データ、志向的对象、概念ないし語の意味、知覚する作用 (the act of perceiving)、等々種々のものが、

観念 (idea) の言い替えとして成り立つと解釈されてきた。感覚の単純観念に関しては、これは 20 世紀の哲学用語でいえばセンス・データであって、ロックは、知覚論としては知覚表象説をとった、とするのが普通の解釈であろう。しかし、本論文は、哲学的知覚論で扱われる外界と表象との関係という問題は、ロックの取り組んだ問題ではなかった、という立場に立つ。ロックは、外界と表象との関係を問う知覚の哲学的分析にほとんど興味を持っておらず、その意味で、どんな特定の知覚論にも与してはいないと思われる。

- (2) 『人間知性論草稿 A, B』からの引用箇所は、Locke [1990] におけるセクション番号とページ付けによってしめす。
- (3) 『人間知性論』からの引用箇所は、Locke [1975] における巻一章一節の番号によって示す。なお、訳文は基本的に拙訳であるが、岩波文庫版の大槻春彦訳を参考にさせていただいた。
- (4) 第 1 節で言及した表象と外界の関係は、つきつめれば、感覚への徹底した懐疑にどう対処するか、という問題になる。この問題に対するロックの回答は、『草稿 A, B』執筆の頃 (1671) から『人間知性論』刊行 (1689) へ到る期間中に、全く変化しなかった。『草稿 B』§ 39, p.147 の文章は、まったくそのまま『人間知性論』4 巻 11 章 8 節に現れる。ロックの回答の趣旨は、感覚はわれわれがこの世界で生存するための機能であるから、もしも燃える蠟燭を見てその実在性を疑うのなら、炎の中に指を差し入れてみればよいのであって、そのとき感じる痛みは、炎の実在性の証拠として、われわれにとって必要なだけの確実性を持っている、というものである。感覚への懐疑に対する同様の功利主義的な回答は、『草稿 A』§ 10, p.21 にも、また『人間知性論』4 巻 2 章 14 節にも見られる。
- (5) 'idea' という言葉が、1 巻 1 章 8 節でロックがいうように、スコラの知覚論でいうところの 'species' の意味も表すのだとすれば、'idea' が外的事物から心へやってくる何かとして、つまり、ある意味で〈心の外に〉あるものとして語られる場合があってもそれほど驚くには当たらない。スコラ哲学において 'species' というのは、外的事物から心へやってくる媒介者である。ただし、ロックは、ボイルやデカルトに学んで、事物から感官へやってくるのは微粒子だと考えているから、'idea' を心の外にある何かとして語るのは、もちろん異例の語り方ではある。Alexander [1985] pp.97-100 を参照のこと。
- (6) 'positive' は訳語を当てにくい言葉である。仮に、「実定的」という訳語を当て、さらに煩をいとわず 'positive' という原語を添えることにした。意味するところは、「他と切り離してそれだけ取り出せる」ということと「事実に関わり、思弁的でも理論的でもない」ということの二つである。O. E. D. の記載事項でいえば、5 番目と 6 番目の意味である。下を参照のこと。
 '...5 Having no relation to or comparison with other things: free from qualifications, conditions, or reservations; absolute, unconditional; opposed to relative and comparative.....6 Dealing only with matters of fact and experience; practical, realistic; not speculative or theoretical...'
- (7) 実定的 positive ということについて語る文脈で、観念と感覚的对象との両方が考察の対象として挙げられていることに注意すべきである。観念は内在性を示唆しうるので、感覚的对象の方まで挙げないと、ロックの意図に合わない。このことは、「一個の単純で実定的な観念 (a simple positive idea) (引用 2)」を問題にすると、ロックが外的対象を考察から切り捨てて意図などないことをはっきり示している。
- (8) ただし、一次性質と二次性質の区別が議論されるときには、この限りではない。一次性質はそのまま事物に実在し、二次性質は微粒子の一次性質の能力にすぎないとされる。ただし、これは、事物における性質の実在性のあり方の区別であって、観念が事物に対応するかどうかという意味での実在性の区別と混同してはならない。感覚の単純観念は、一次性質であろうと二次性質であろうと実在的 real なのである。

- (9) 観念から存在を導き出そうとする傾向はロックには希薄であり、一般に、観念を持つということは存在するということの必要条件でも十分条件でもない。人類の中には、磁石の観念を持っていない人々もいるし (1-4-9)、また、「われわれが心の中に何かの観念を持っているということは、そのものの存在を全然証明しない。それはちょうど、ある人の肖像画が、その人物の存在を証明しないのと同じである。(4-11-1)」ロックは、最も完全な存在者という観念から神の存在を導き出すいわゆる神の存在論的証明を、「よくないやり方 (an ill way)」と退けている (4-10-7)。ただし、感覚の単純観念の場合だけは、感覚の単純観念を持つということが、そういう単純観念を与えるような対象が実在するということの十分条件になる。
- (10) Kenneth Dewhurst [1966] p.34 ff.より。以下では、この書物からの引用は、著者名 Dewhurst とページ付けによって、本文中に記す。なお、ロックとシドナムの交流の事実経過とシドナムの医療実践については、平野耿 [1980] にも有益な紹介と考察がある。
- (11) 以下の記述は、Andrew Cunningham [1989] による。
- (12) 近世初頭には、ガレノスを範とする旧体制の医学と、パラケルススに代表される錬金術師的な医学（医化学）とが「理論」的に相争っていた、というのが通説である (Porter [1987] pp.13-31 参照)。シドナムは、このどちらにも肩入れせず、臨床観察と臨床治療に徹する立場をとった。なお、この立場自体がひとつの「理論」的な態度である、などというような「理論」という語の拡張した使い方はとらないことにしたい。判明に命題化されない予想や期待や先入見や作業仮説は「理論」と見なさない方が、シドナムやロックやボイルなどのいう「観察」という概念を正確に捉えるためには適切であると思う。理論と観察の関わりをどう捉えるかについては、Hacking [1983] pp.153-4, pp.167-185, を参照されたい。また、17世紀当時の医学の「理論」対立について付言すれば、ボイルによると、ガレノス派とパラケルスス派との「理論」上の対立の一つは、パラケルスス派が「すべての病気が治癒可能である」と主張したのに対して、ガレノス派は「ある病気は決して治癒可能でない」と主張した、ということであった。ボイル自身は、「いかなる病気も、治癒不能だということはないが、すべての病気がいかなる患者においても治癒可能であるということもない」という（つまり、どんな患者も始めから不治とは決められないが、実際には、治る場合もあれば治らない場合もあるという）冷静な立場をとっている (Boyle [1772] vol. 2, pp.91-103 参照)。なお、ボイルは、病気が治るということ、を、身体とは生きている機械 (living automata) であると見る機械論的な立場から説明している (Boyle [1772] vol.5, pp.230-240)。
- (13) distinct, flox とともに O.E.D. にも単語として記載がない。天然痘 small pox の下位区分であるが、何を指しているのか不明である。
- (14) O'Conner [1951] pp.47-51, 森口 [1963] pp.245-248, Aaron [1971] p.111-112, などを参照されたい。
- (15) 単純観念を、識別能力によって抽出される単位と見なす解釈は、Alexander [1985] pp.106-110 で述べられている。ただし、本論文では、識別能力の発展の極致に専門家としての実験的科学者の自然認識を置くが、Alexander [1985] にはそういう考え方はないと思われる。
- (16) 人間の発達過程と技術知との関連性について、筆者は、鬼界彰夫（筑波大学）との対話から多くの示唆を受けた。

文献表

Aaron, Richard. I. [1971]

John Locke, Third. edition, Oxford: The Clarendon Press

Alexander, Peter [1985]

Ideas, Qualities and Corpuscles: Locke and Boyle on the External World, Cambridge: Cambridge Univ. Press

Boyle, Robert [1772]

The Works of Honorable Robert Boyle in six volumes, London, (reprinted by Georg Olms, Hildesheim, 1965)

Some Considerations touching the Usefulness of Experimental Natural Philosophy, in vol. 2 of *The Works* [1772] pp.1-255

A Free Inquiry in the Vulgarly Received Notion of Nature, in vol. 5 of the *Works* [1772] pp.158-254

Cranston, Maurice [1985]

John Locke, A Biography, Oxford: Oxford Univ. Press

Cunningham, Andrew [1989]

"Thomas Sydenham: epidemics, experiment and the 'Good Old Cause'" in French, R. and Wear, A. (eds.) [1989]

Dewhurst, Kenneth [1965]

Dr. Thomas Sydenham (1624-1689): His Life and Original Writings, Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press

French, Roger and Wear, Andrew (eds.) [1989]

The medical revolution of the seventeenth century, Cambridge: Cambridge Univ. Press

Hacking, Ian [1983]

Representing and Intervening, Cambridge: Cambridge Univ. Press

平野 耿 [1980]

「科学革命とロック」 田中正司, 平野 耿 責任編集『ジョン・ロック研究』27-54 頁 御茶の水書房 [1980]

Locke, John [1975]

An Essay Concerning Human Understanding, edited by P. H. Nidditch, Oxford: The Clarendon Press

Locke, John [1976]

The Correspondence of John Locke, vol.1, edited by E.S. de Beer, Oxford: The Clarendon Press

Locke, John [1990]

Drafts for the Essay concerning Human Understanding and Other Philosophical Writings, vol.1, edited by P. H. Nidditch and G. A. J. Rogers, Oxford: The Clarendon Press

森口美都男 [1963]

「イギリス経験論」田中美知太郎 編『講座 哲学大系 第2巻 哲学の歴史』235-264頁 人文書院 [1963]

O'Conner, D. J. [1952]

John Locke, Hammondsworth: Penguin

Porter, Roy [1987]

Disease, Medicine and Society in England 1550-1860, London: Macmillan